

2014年6月26日／浪宏友ビジネス縁起観塾

真の人生のために

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「普賢菩薩勸発品」

1. 普賢菩薩勸発品のあらすじ

東方の宝威徳上王仏の国から法華経を聞きにやってきた普賢菩薩が、その概要を聞いただけで感激し、「のちの世においてこの教えを受持するものをかならず守護いたしましょう」ともうしあげますと、お釈迦さまがそれをおほめになって、「普賢菩薩とおなじような行をなすものを、わたしも守護しましょう」とおおせになりました。つまりこの品は、末世の法華経行者を元気づけ励まされる章であります。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.221）

2. 「教えを受持するもの」について

(1) 生かされている自覚

もしわれわれが、いつも「自分は久遠実成の本仏に生かされているのだ」という自覚を深くもち「久遠実成の本仏に生かされているかぎりには、そのみ心のおりに生きることが正しい生きかただ」という明快な真実を悟り、本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教えにしたがって生きてゆきさえすれば、つねに大自信をもった生活ができ、人生苦などはあってもなきにひとしくなってしまうのです。

それが、ほんとうの人間らしい生きかたであり、この品（如来寿量品）は、最大の要点としてこのことを教えられているのです。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.169）

(2) 人間らしく生きる

“普賢菩薩勸発品のあらすじ”における、「教えを受持するもの」「普賢菩薩とおなじような行をなすもの」は、いずれも「本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教えにしたがって生きている人」であり、「ほんとうの人間らしい生きかた」を目指している人です。

ビジネス縁起観の理論で言えば「自分、自分と関わりのある人びと、世間のあらゆる人びとの幸福のために貢献する生き方」を目指している人と言ってよいと思います。

(3) 守護

このような人びとを、普賢菩薩も釈迦牟尼世尊も、守護してくださるというのです。

3. 「守護」について

(1) 「守護」とは

① 「守」も「護」も「まもる」ことです。「まもる」とは、「現在の状態が変わらずに続いていくようにすること」です。

② 「守護する」とは、現在の状態が変わらずに続いていくように、応援したり、助けたりすることです。

(2) 「守護」の内容

① 普賢菩薩の「この教えを受持するものを守護する」とは、「この教えを受持するものが、受持し続けることができるように応援したり助けたりする」ことです。

② お釈迦さまの「普賢菩薩とおなじような行をなすものを守護する」とは、「普賢菩薩とおなじような行をなすものが、それを続けることができるように応援したり助けたりする」ということです。

4. 普賢菩薩の四つの行

普賢菩薩はつぎの四つのはたらきを具現した菩薩です。

- ・自ら「法華経」の教えを実践する。
- ・「法華経」の教えを、あらゆる迫害から守護する。
- ・「法華経」の教えを実践するものが自ら招く功德と、それを迫害するものが自ら招く罰を証明する。
- ・「法華経」の教えに背いたものも、懺悔することによって罪から解放されることを証明する。

(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p. 667～668)

前記の「普賢菩薩とおなじような行をなす」とは、これらの行を実践することです。

なかでも「自ら『法華経』の教えを実践する」ことであると考えられます。なぜなら、妙法蓮華経こそ、「本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教え」にほかならないからです。

5. 守護の本質

仏教における、仏陀・菩薩・神々による守護の本質について考えてみます。

真理の教えを実践するものには、そのまま実践し続けるように励ましながら、応援し、助けてくださいます。

真理の教えから外れるものには、早く正しい道に目覚めて歩み始めるように、はたらきかけてくださいます。

このようにして、あらゆる人びとが、真理の道を歩み続けることができるように、仏陀・菩薩・神々が、手を尽くしてくださっているのだと思います。

これが守護の本質であろうと思います。

6. 妙法も実践してこそ

(1) 普賢菩薩は行の菩薩

なぜこの最後の章になって普賢菩薩が登場するかといいますと、それには深い意味があるので。普賢菩薩は〈理・定・行〉をつかさどる菩薩とされていますが、白象王に乗って出現することが象徴しているように、ほかの二徳（理と定）よりも、徹底した〈行〉の典型であるとするべきなのです。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 221～222）

(2) 智慧の文殊菩薩

法華経のはじめのほうでは、菩薩は〈智〉の文殊菩薩でした。（同p. 222）

(3) 慈悲の弥勒菩薩

なかほど（とくに《如来寿量品》）においては〈慈〉の弥勒菩薩でした。（同p. 222）

(4) 普賢菩薩が登場する理由

そして、最後の結びにおいて〈行〉の普賢菩薩が登場するのは、いうまでもなく、法華経を聞いて諸法実相の智慧を知り（迹門）、久遠本仏の大慈悲に生かされている真実（本門）にめざめたものも、その教えを実践しなければ意味をなさないからです。（同p. 222）

7. 法華経の成り立ち

(1) 智慧

① 智慧が必要

人間が正しい、よい人間になるには、何よりもまず、智慧が必要です。「無知は罪悪である」といわれるように、悪いことというものは、ほんとうの智慧がないから起こるものです。

（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p. 357）

② 理法を知る智慧

ほんとうの智慧というのは、この世の中のすべてのものごとの本質をよく見通し、ものごとが起こったり、移り変わったりする理法を正しく知っていることです。（同p. 357）

③ することが立派になる

こういう智慧が備わると、することなすことが自然と正しく立派にならざるをえません。頼まれても、わるいことなどできるものではありません。欺されたり誘惑されたりして、わるいことをするような破目にもおちいらぬのです。（同p. 357）

④ 世の中が平和に

世の中の人すべてがこういう智慧を身につけるようになれば、それだけで世の中はどんなに明るく平和に、そして豊かになるかわかりません。（同p. 357）

⑤ まず智慧を身につける

それで釈尊は何よりもまずほんとうの智慧を身につけることを教えられたわけです（同p. 357）

(2) 慈悲

① 自分ひとり智慧を備えても

ところが、ほんとうの智慧を身につけると、世の中というものはあくまでも持ちつ持たれつで立っているもの（諸法無我）であって、自分ひとりが智慧を備えていても、または自分ひとりが正しくても、世の中全体はよくなるということがわかります。（同p. 358）

② 「慈悲」の心が湧く

それで、智慧を身につけていない、したがって道を踏みはずしている人びとを見ると、どうしてもそれを救ってあげねばならない気持ちになります。すなわち「慈悲」の心が湧いてくるのです。（同p. 358）

(3) 実践

「慈悲」の心が湧いてくれば、おのずからそれを「行為」に表わさずにはおられなくなります。法を知らない人には法を説いてやり、道を踏みはずしている人は正しい道へ引きもどしてやり、法を修業している人に対してはそれをよく守り育ててやらねばおられない気持ちになります。

（同p. 358）

(4) 仏の教えの完成

こうして、「智慧」と「慈悲」と「実践」の三つが揃って完全に行われるようになったときに、仏の教えは完成したことになります。そして、この世がそのまま浄土となるのです。（同p. 358）

(5) 娑婆即寂光土

「この世がそのまま浄土」とは、「娑婆即寂光土」ということです。

智慧・慈悲・実践が揃っていない人は、移り変わるものごとに引きずられて、苦しみ悩みが尽きません。その状態が娑婆です。

智慧・慈悲・実践が揃った人は、ものごとがどのように移り変わっても、真理に合った生き方から外れることはありません。ですからいつも安らかで明るい毎日を送ることができます。その状態が寂光土です。

娑婆と寂光土は、別の世界ではありません。智慧・慈悲・実践が揃っているかないかで、同じ世界が娑婆になったり、寂光土になったりするのです。

8. 四法成就

(1) 普賢菩薩の質問

世尊、わたくし（普賢菩薩）は宝威徳上王仏の国におりましたが、この娑婆世界において「法華経」をお説きになっておられるのをはるかにうかがいまして、多くの菩薩衆と共に聴聞しにまいりました。世尊、どうぞお教えてください。如来の滅後においては、どうしたらこの「法華経」の教えの真の功德を得ることができるでしょうか。（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p. 669～670）

(2) 釈迦牟尼世尊のお答え

もし信仰深い男女が、つぎの四つのことがらを成就すれば、如来の滅後においても、この法華經の教えをつかんだことになり、法華經の眞の功德を得ることができましょう。それは、

第一に、自分は諸仏に護念されているのだという絶対の信念をもつこと。

第二に、日常生活に善行を積んで、徳を育てるように努力すること。

第三に、正しい教えを奉ずる人びとの仲間にはいること。

第四に、世の人みんなといっしょに救われるのが眞の救いであることを知り、みずからおおくの人びとを救う心をもつこと。(庭野日敬著『法華三部經 各品のあらましと要点』p. 223)

(3) この言葉の意義

これは、いままでにくわしく説いてこられた教えを、一般の人も理解し、実践できるように簡潔にまとめられたものであって、法華經の教えのあまりの深遠さにすこしたじろぎ気味だった人びとも、これによって「自分にもできるのだ」という勇気を得ることでしょう。まことに《妙法蓮華經》の結びにふさわしい教えであります。(同p. 223～224)

9. 眞の人生への道しるべ

四つの教えを、もう少し考えてみたいと思います。

(1) 諸仏に護念されている

「自分は諸仏に護念されているのだという絶対の信念をもつ」とは、久遠本仏の大慈悲に生かされている眞実にめざめ、確信することです。

久遠本仏の大慈悲に生かされていることを自覚し、久遠本仏の大慈悲によって説かれた教えに沿って生きていけば、眞の人生を歩むことができます。

(2) 日常生活に善行を積む

① 「日常生活に善行を積む」とは、諸法実相の智慧を知りこれを日常生活に実践することです。

② 日常生活における善行とは、取り分けたことをするわけではありません。

日々、人間らしく、自分のすべきことをすることが善行であり、自分・他人・世間の幸せのために適切に振る舞うことが善行です。

③ 善行を積むとは、善行を怠らずに続けることです。

いかなる善行でも、単発で終わらせたのでは積み重なりません。日々、善行を続けるから積み重なるのです。

善行を積むことによって、自分自身が個人的にも、社会的にも、たゆみなく育ち、やがて大きな果実を生み出すことになるのです。

(3) 徳を育てる

徳があるとは、寛容と慈悲に溢れ、真理に沿ってものごとを認識し、考え、決断し、行動することができることです。これを福德ともいいます。

「徳を育てるように努力する」とは、久遠本仏の大慈悲によって説かれた教えに沿って実践する努力をすることです。

(4) 仲間

どんなに素晴らしい教えでも、自分ひとりだけで修業しようとする、怠けたり、挫折したりする恐れがあります。「正しい教えを奉ずる人びとの仲間にはいる」ことによって、教え合い、励まし合い、注意し合って、怠けることなく、挫折もしないで、修業を続けることができます。

(5) みんなとともに

「世の人みんなといっしょに救われるのが真の救いであることを知り、みずからおおくの人びとを救う心をもつ」とは、私たちが目指している「自分・自分と関わりのある人・世間のあらゆる人びとが真理の道を歩み、幸せになることを願って努力を続けること」にほかなりません。

(6) 四法成就と人生

四法成就の教えは、真の人間としての生き方を示したものと受け取ることができます。